

光丘文庫報

光丘

No.161



「新しき革袋に」

詩人・元光丘文庫長

高瀬 靖

駅前新しい図書館ができてなかなか評判もよいようなので、早速行ってみた。結構広い敷地にホテルやレストランが建て込んでおり、まごついてしまったが、何となく人の流れに従っていくと、新しい街『ミライニ』に行き着いた。何はともあれ、新図書館の書架にたどり着いて一安心、館内は明かりも適度に抑えられ、落ち着いた雰囲気である。久しぶりの本の借り出しとあって、先ずは気楽に楽しめるものをと、夢枕獯の「宿神」四巻を借り出した。自動貸し出し機の操作を係の人に教えてもらい、しっかり補強された本の感触を確かめながら、酒のみならず、本もまた「新しき革袋」に入れるべきかと実感した次第。

さて、ついでに思い出したのは、「光丘文庫」のこと。往年の学生・読書家にとつて、左右に翼を張った社殿造りの文庫は、それこそ文化の殿堂であったに違いない。現在、文庫の建物は、地震等によって倒壊の危険ありということでも立ち入り禁止となり、本問家由来の貴重な書物は、全て中町庁舎に収納されている訳だが、やはり雰囲気としては、「文庫」の高雅な味に及ぶべくもない。

今から四半世紀前、教員生活を終えて三年ばかり、梅木市教育長のもとで文庫長の仕事をさせていただいた。仕事は、建物と書籍の管理であり、全国から貴重な古文書の研究者が訪れたが、その数は高々年間二百名程度であった。

私は、この建物のハイカラな作りに魅かれ、特に正面玄関の二階の展望台のしつらいや、昭和天皇がご休憩になった貴賓室の作りが気に入って、何とか市民の方々に遊びに来ていただけの方法はないかと工夫した。詩の朗読会を催したり、絵入りの草子類の展示を行ったりしたが、なかなか容易に人は集まってくれないものであった。

そんなある日、郷土雛「鶺鴒渡川原人形」関係の方々の訪問があった。亀ヶ崎の大石さんの所で、土人形作りを学んでいる本問光枝さんと松浦正子さんであった。お二人は、市主催の体験教室に参加し、土人形がたくさんできたものの、閲覧に供する会場がないというところで、相談に見えたのであった。私は、鶺鴒渡川原人形が江戸末期から大石家に代々伝えられている土着の土人形であること、全国共通のポピュラーなものほかに、大石家独自の創作による人形がたくさんあること、一体一体昔ながらの製法と材料をもって伝統を守り継いでいること、そしてなにより、赤子が生まれるとその子の無事な成長を願って、土人形を一体買い与える風習が廃れていないことを知ることができた。そこで、市教委とも十分相談の上、一週間、展示ケースの一部に飾ってもらうことにした。すると、お二人の宣伝効果もあったせいも、あれよあれよという間に二百人を超す観客が訪れてくれたのであった。「たった一日で、一年分の来客数を越えちゃったよ。」とお二人に話すと、小躍りして喜んでくださったことが思い返される。「鶺鴒渡川原人形伝承の会」のささやかな第一歩であった。

もっとも、すべてが良かったことばかりではない。実は、当時、市史編纂室の方々が文庫内の一室でお仕事されており、「うるさくて仕事にならない。」との当然のお小言を賜ったのである。なにしろ、小生にとって、教員の大先輩にあたる方々ゆえ、当方ただ身を縮めるしかないのであった。すべてはなつかしい思い出である。文庫の古書もまた、新しき革袋に、と祈るばかりである。

歴史公文書の保存と活用について

東北公益文科大学准教授・
酒田市公文書等管理委員会

門松 秀樹

酒田市では、令和四年四月一日より「酒田市公文書等の管理に関する条例」が施行されたことにもなっており「特定歴史公文書」の公開が開始された。

ところで、「特定歴史公文書」とは、一体、何を指しているのだろうか。まず、「酒田市公文書等の管理に関する条例」に規定される公文書とは、「実施機関の職員が職務上作成し、又は取得した文書」である。つまり、「役場が仕事のために作ったり集めたりした書類」とでも言えようか。そして、歴史公文書とは、「公文書のうち、歴史資料として重要な文書」のことであり、特定歴史公文書とは、「市長に移管された」歴史公文書である。実は条例において公文書は種類によって保存期間が定められているが、特に重要なものについては永久保存として、市長が管理することと定められている。この永久保存されている歴史公文書が特定歴史公文書といふことになる。

なお、酒田市のホームページによれば、四月一日現在で特定歴史公文書は一万二千五百冊が保存・公開されている。公開されている特定歴史公文書の目録も、酒田市のホームページ上から確認することができるが、「議会」、「教育・文化」、「建設・土木」、「行政一般」、「災害」、「産業（商工農水）」、「市町村合併」、「酒田大火」、「上下水道事業」、「福祉・保健衛生」、「兵事」、「その他」に分類されて整理されている。一万二千五百冊「枚」ではなく、「冊」である。保存用の段ボール箱が一〇〇〇箱以上となる膨大な資料を整理・保存・管理する労力は並大抵のものではない。関係部局の方々のご尽力には、ただただ頭が下がる思いである。

膨大な特定歴史公文書を保存しているのだろうか。筆者は日本政治史を主な研究領域としているが、先日、東田川郡役所について調査を行った。東田川文化記念館として、明治二〇（一八八七）年に創建された建物が現在も

も遺されているが、「役所」としてどのような仕事をしてきたのかについては、まだ明らかにできていない点も多い。

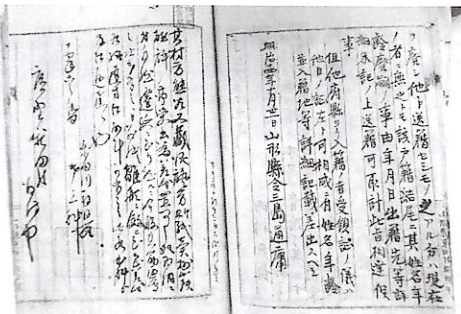
一般的には、明治一（一八七八）年の郡区町村編制法で設置された郡は、折から高揚しつつあった自由民権運動を警戒して、自治体である区（現在の市や特別区に相当）や町村を監視・統制するための国の機関であったとされることが多い。

そこで、郡役所の実態とはどのようなものであったのかを調査してみようと考えたのであるが、酒田市が公開している特定歴史公文書の中に、「明治十三年役場開設簿（東田川郡役所）」という資料を偶然に見つけた。酒田地域は大半が飽海郡に属しているが、酒田市と合併した広野村は東田川郡に属しており、これは、広野村が保存していた資料であった。

資料は、明治一三年八月二十五日から明治一七年六月二一日までのいわば業務記録簿であったが、管轄下にある町村に対して、道路の清掃や整備、小学校の通学路の整備、転入出者に対する戸籍管理、蝗害の報告、不作の際の税の減免に関する手続き、最上川

における川漁の規制、町村吏員（職員）の服務規程案の検討など、ごく限られた期間の記録であるにもかかわらず、地域のために実に広範な行政活動を行っていたことが明らかにできた。東田川郡役所の職員も、自分たちの書いた何の変哲もない業務記録を、一四〇年も未来の人間が歴史研究に役立てようとするとは思ってもよらなかったことだろう。

転入出者の戸籍管理の徹底を命ずる三島通庸県令からの命令(部分)



このように、特定歴史公文書は、酒田というまちがどのような歩みを経て現在に至っているのかを探るためにも重要な手がかりとなる。

そしてそれは、現在の私たちが将来を生きる人々のために遺していかなければならない財産でもある。ゆえに一見すると歴史的な大事件でもない、議会や役所のごく普通の書類や記録も保存されているのである。明治時代の郡役所の日常業務が令和の現在ではすっかり分からなくなってしまうように、現在はおく当たり前のことが、五〇年、一〇〇年先にはまったく分からなくなってしまうことも大いにありえるだろう。

歴史学では、近年、本人や関係者にインタビューを行い、それを記録として保存する「オーラル・ヒストリー」が盛んに行われている。ただ、人間の記憶なので、時には記憶違いなども起こる可能性がある。それを検証するためには欠かせないのが、同時代に作成された公文書による記録となるのである。

そして、特定歴史公文書は、一般に公開されているので、申請すれば誰でも見ることが出来る。これは、例えば、自分が体験した出来事を振り返るなど、特定歴史公文書を通じて、酒田の歩みを自分の目で直に確かめることができるということでもある。

市民にとって貴重な財産である特定歴史公文書を市民自身が活用することで、大いに役立てていきたい。

相撲界で活躍した郷土の先人たち

光丘文庫調査員 中山 洋

「私の土俵人生において一片の悔いもございません。」と第七十二代横綱稀勢の里が現役引退してから三年半が経ちました。昇進し新横綱として臨んだ三月場所での、涙の逆転優勝はファンの感動を呼ぶものでありました。それから三年以上が経過し、当時横綱だった白鵬、鶴竜、日馬富士は土俵を去り、序二段から復活した照ノ富士が綱を張り、その勢力図は様変わりした感があります。今は一人横綱状態が続いており大関陣の奮起を期待するとともに、一日も早い若手の台頭が待たれるところです。

さて、郷土出身の力士に目を向けますと酒田市出身の北の若という楽しみな逸材が番付を上げ、十両まで昇進してきました。中学横綱、高校横綱経験者でもあり、今後更に稽古に励み大いに活躍し故郷を盛り上げてほしいところです。昭和時代の庄内出身で言えばやはり横綱

柏戸の印象が強いわけですが、若い世代では知らない人もかなり増えてきたのではないのでしょうか。酒田出身では若瀬川という力士がかつて活躍いたしました。十代で関取に昇進し最高位は東前頭筆頭まで上がりました。怪我で苦しんだ印象ですが郷里を大いに沸かせたものでした。

では、さらに古い時代にはどんな郷土力士がいたのでしょうか。「古今庄内産相撲記」「庄内角力記」に主だった力士が記載されていますので、その中から数人の力士を紹介したいと思います。



「庄内角力記」



「古今庄内産相撲記」伊藤資言 明治12年4月 写

谷風丹右衛門

「庄内角力記」「古今庄内産相撲記」いずれも最初に出てくる名前で寛文から延宝年間にかけての力士、鶴岡市五日町の生まれ。背丈五尺九寸の怪力で全国を相撲修業に遍歴し、無敵でありました。投げ技での命のやりとりもあつた時代に、丹右衛門はその怪力を活かした突き押し、寄り切りといった押し相撲を得意としていました。

春日山鹿右衛門

同じ名跡の力士は庄内から四人出ていますが、ここで紹介する春日山は備引で安永二年に生まれた小兵の春日山です。最高位は小結でしたが、五尺三寸五分の小兵力士ながら六尺五寸四十五貫の雷電為右衛門を破った力士で、雷電を破った十人の力士の中の一人です。小兵ながら、幕内の番付枚数も今より少ない時代にその地位を維持するのは困難を極めたと思像しますが、五十一歳で引退するまで幕内で相撲を取り続けました。

朝日獄鶴之助

天保九年生まれ。新潟で生まれましたが七歳の時父を亡

くし、七歳からは温海釜谷坂で育ち、さらに由良に移り住みました。子供の頃から日本の荒波で漁をしながら鍛えられた怪力で、品川のお台場築きの酒井家の人夫に取り立てられ、やがて藩の有志は彼を立田川親方に弟子入りさせました。そして明治十年には大関に昇進しました。

朝日獄も谷風、佐野山(後述)と同じように男前の風貌で人気者でした。

大達羽左衛門

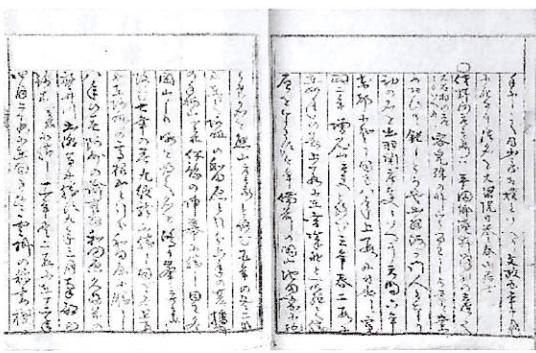
嘉永六年鶴岡市の生まれ。二十一歳で朝日獄の門に入りました。大達は大関まで昇進しましたが前掲三名とは対極に見える力士で、大酒飲みで親方を殴ったり天衣無縫、問題児と伝わっています。ただ本当の姿は如何なものであつたかは知る由もありません。

佐野山庄兵衛

明和四年に平田郷滝野沢村、現在の酒田市で農家の長男として生まれました。

「古今庄内産相撲記」には「容貌殊のほかうるわしけれど技において鈍しとかや」との記載があり、成績は決して芳しいものではなかったよう

であります。酒田市史(生活文化篇)によると、出場四十八場所中勝越したのはたった七場所しかありませんでした。通算勝ち星は八五、負け星一八七という成績でした。にもかかわらず江戸の町民には人気があり、番付が下がるのを許さなかったとあります。興行には欠かすことができない人気者であつたのです。又、名門出羽ノ海一門にとつて初めての幕内力士でもありました。



「古今庄内産相撲記」佐野山庄兵衛記載頁

※参考文献

酒田市史 生活文化篇
庄内から出た力士 伊藤珍太郎著
方寸第七号 酒田古文書同好会編

日和山「文学の散歩道」の案内(三)

日本現代詩人会員 相 蘇 清太郎

日和山公園の「文学の散歩道」は酒田を訪れた文学者、

酒田が生んだ文人、学者などの文学碑(短歌、俳句、詩、紀行文、小説など)二九基が配置されている。前回及び前々

回、芭蕉が「おくのほそ道」の

途次、酒田で詠んだ句について、また芭蕉と随行の曾良を

歓迎した地元酒田の俳人たちを紹介した。一七世紀、元

禄時代のことだった。今回は、昭和の酒田の詩人・佐藤十弥の詩碑を見てみよう。

詩人・佐藤十弥

佐藤十弥(一九〇七〜八〇年)は、酒田市伝馬町に生れる。法政大学仏文科中退後、浅草エノケン一座で舞台美術担当。のち雑誌社に転職、絵画も描き、作家志望でもあったが、一九三五年帰郷して文芸活動と宣伝美術に専念し、商業美術の先駆的役割を果たした。特に『みちのく豆本』(佐藤公太郎主宰)をはじめ郷土の出版物に特色あ

る装丁を数多く残している。

十弥はグラフィックデザイナーとして特別な才能の持ち主であった。

生涯詩人として活躍し、戦

前戦後、昭和と、現代詩精神をけん引した詩人であった。

現代詩精神とは、時代認識、生活、思想、感覚を現代に

アップデートするポエジー

(詩)を志向する精神のことである。佐藤十弥の鋭い大きな目をしたダンディな風貌

は、フランス一九世紀の高踏派の詩人ゴーチエのような、

風雅を凜として体現する詩人であったように思う。

戦前、十弥たちが始めた同人雑誌『骨の木』は、同世代の

酒田の青年たちが才能を結集して発行した、きわめて高

質な文芸誌だった。執筆陣も、

画家・中川一政、歌人・吉井勇、

小説家・井伏鱒二、フランス文学者・鈴木信太郎など一地方都市としての文芸誌として

は、瞠目する陣容であった。

十弥はこの雑誌の意匠・装丁をも手掛けた。

「海」の詩人

「文学の散歩道」の碑に刻まれた詩句は次のとおり。

海 佐藤十弥

海に生きた人

海に死んだ人

海を愛する人

海を憎む人

人さまさまに

海に向って

立ちほだかる

だが

海は海なりの姿で

時に微笑み

時に怒り

チェロを奏でる

この詩は酒田市民芸術祭二十周年記念特別作品として作詞を委嘱された創作曲

「海」の一節である。この曲は、公演目前の一九七六年十月

二十九日、酒田市は未曾有の

大火(中心市街地一七〇〇棟

以上を焼く)に見舞われ、公演は翌年になったのだが、被災した市民の心情を荒れ狂

う波浪の海として加筆したのである。

海の詩については、佐藤十弥追悼号とした『荘内文学

第六号』(荘内文学の会、昭和五十六年五月)は「海について」という作品を掲載している。

海について 佐藤十弥

古風な母の五指の間に

海があった

海は母に似て

静かに微笑むかと思うと

時に怒りのチェロを奏でた

(全六連中、第一連)

海は十弥にとって、刻々と変わる相貌を示すが、繊細であり、かつ茫洋として作者を

包み、許容する存在であったようだ。『荘内文学』同号に、

「佐藤十弥さんのこと」と題して、「十弥さんとは一番古

い友達で同じ町内で生まれ育った」と酒田の代表的文化

人・佐藤三郎は書き「やはり彼の生涯は一冊の本にしな

ければ書き尽くせない」と結んでいる。

なお佐藤十弥は、酒田市広報が昭和五〇年から六四年

まで十五年間募集した「港の詩」コンクールにおいて、初

期の五年間、選者を務めた

(太田清蔵とともに。十弥逝去後は佐藤道也に替わった)。

入賞作品は『港の詩』(酒田市、

平成三年三月発行)として刊行。応募作品は海、波、港、街をテーマにしたものが多かったが、その選評は、現代詩としての詩作品の達成を厳しく求めるもので、多くの若々しい才能の書き手を鼓舞したのだった。佐藤十弥の詩集には『つぶらなるもの』『わたしの紋章』などがある。



文学の散歩道 佐藤十弥「海」詩碑

※訂正のお願い

一六〇号四ページ三段目の十行目「涼しや」を「涼しさや」に、四段目の二行目「不玉」を「玉志」に訂正願います。

謎に包まれた酒田の女絵師 梅月はいつ亡くなったのか

酒田市立資料館調査員 相原久生

梅月は江戸時代後期の女性絵師です。内町組大庄屋・伊東家に生まれ、最上川埋木細工を製作した彫刻師・白崎善次郎(文錦堂)の養女となつて、谷文晁に師事。才能に恵まれながら三十三歳という若さで亡くなつたといわれ、現存する作品を見る機会はほとんどありません。一方で人物評は詳しく伝わっています。

酒田市立資料館では一昨年、梅月が習作として描いた、あるいは手本にしたと思われる絵十二点など、修業時代の梅月を知る手掛かりとなる貴重な資料を見つけて入手し、昨年十一月から今年二月にかけて開催した新収蔵品展「梅月 謎多き酒田の女絵師」で初公開しました。展示に当たり、梅月とその関係者の経歴を調査し年表にまとめようとしたのですが、梅月が生まれる二年前に、文錦堂が亡くなつていゝな、ど時系列に矛盾が見られ、作

業が進みませんでした。調べているうちに、前提となっている梅月の生没年そのものを見直す必要があると思ひ至りました。

初めて梅月を活字本で紹介したのは、昭和十年(一九三五)に出版された『荘内文雅人名録』(玄々堂芦汀編)だと思われまゝ。「梅月女 伊東弥伝治の家より出たる人。酒田外の町(外野町)に住す。文晁に学ぶ」といふ。弘化三年(一八四六)七月没」と書いています。

その二年後に出版された『荘内人名辞書』(阿部正己編)では「酒田伊東伝内の女。」

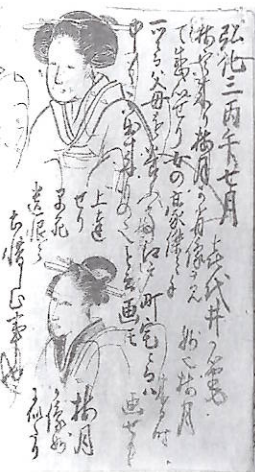


梅月筆「花鳥図(雉)」(酒田市立資料館蔵) 一昨年に収蔵した資料のひとつです。

彫刻師文錦堂の養女となる。才女にして画を鶴岡・氏家剛太夫(龍溪)、後に谷文昇(文晁の誤りか)に学ぶ。今様を歌い白拍子を舞い、鶴岡の文芸家と交際広し。本姓は佐藤。夫は鋳物師にて大和屋と称す。文政五年(一八二二)頃、養母を伴いて江戸に出て画を画きて母を養えり。天保五年(一八三四)庄内に帰る。江戸にて留別の書画会を開き、会するもの七百人に及べり。天保六年、禅龍寺にて氏家龍溪の追善画会を梅月の主催にて開く。江戸にて死すといふ」と丁寧で紹介しています。

阿部正己は生没年には触れておらず、没年齢も「齡三三」と推定するにとどめています。

『酒田人名辞書』(田村寛三著/昭和四十九年)、『新編庄



池田玄齋著「病間雑抄」第九冊 (酒田市立光丘文庫蔵/酒田市指定文化財) 右下は、玄齋の息子の妻・菱代井が描いた梅月の似顔絵。弘化三年七月、梅月と親交のあった佐藤梅宇がこの似顔絵を見て、その死を惜しんだことがつづられています。

内人名辞典』(庄内人名辞典刊行会編/昭和六十一年)では、名前を生家の姓を付けた「伊東梅月」としています。内容はほぼ庄内人名辞書を踏襲していますが、弘化三年に三十三歳で没したという説を採っています。

どの本の内容も、主に池田玄齋(※)の随筆集『弘采録』『病間雑抄』(ともに酒田市指定文化財)を参考としています。梅月と親交があった玄齋は、彼女の絵師としての実力を高く評価し、「女子にては無双」などと才女ぶりを称賛する文章を何度も書いています。

しかし確認した限り、年齢や具体的な年月日を示した記述はほとんどなく、生没年を記した記事も見つかりませんでした。病間雑抄第九冊

には「弘化三丙午七月、梅宇(庄内の絵師・佐藤梅宇)来り・・・早死遺恨と甚だ惜しむ事也」とありますが、梅月がこの月に亡くなったとは書いていません。もちろん、参考にした文献が別にあった可能性はありますが、この文章を梅月死去について書いたと判断したために矛盾が生じているのではないのでしょうか。また展示前の短い期間だったこともあり、十分な調査はできませんでしたが、伊東家文書の中にも梅月・文錦堂親子に関する資料があることなどが確認できました。展示中には複数の方から、梅月の作品や経歴についての情報提供もいただきました。玄齋の著作と併せて丹念に検証を進め、梅月の生涯に光を当てていきたいと考えています。

※池田玄齋…庄内藩士。三十歳で耳が聞こえなくなり、弟に家督を譲り文筆に親しむ。化政時代に始まる随筆集『弘采録』百三十九巻、その続編ともいふべき『病間雑抄』七十二巻を執筆。

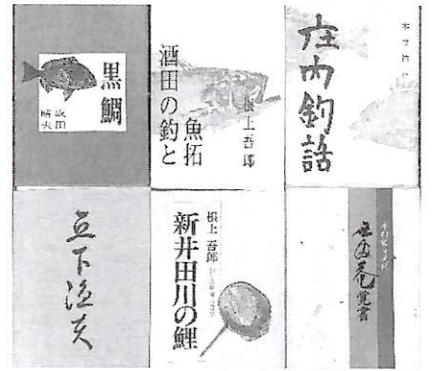
光丘文庫所蔵資料紹介

テーマは釣り！

庄内は絶好の釣場として知られ、作家の井伏鱒二、開高健ら多くの著名人が釣りを楽しみに訪れました。

財団法人光丘文庫第三代文庫長の本間祐介は、釣道具店を営みし庄内竿の蒐集家でもありました。本間が責任者となっていた酒田魚楽会発行の『魚楽 春秋号』(昭和三十年十月)があります。著作本では、みちのく豆本第九冊『庄内釣話』(昭和三十五年三月発行)、第百九冊『無為庵覚書』(昭和六十二年八月発行)があります。

同じくみちのく豆本には、根上釣具店主・根上吾郎著の第七五冊『酒田の釣と魚拓』(昭和五十二年十一月発行)、第百二四冊『新井田川の鯉』(平成三年十一月発行)、俳優成田三樹夫の兄・成田晴夫著

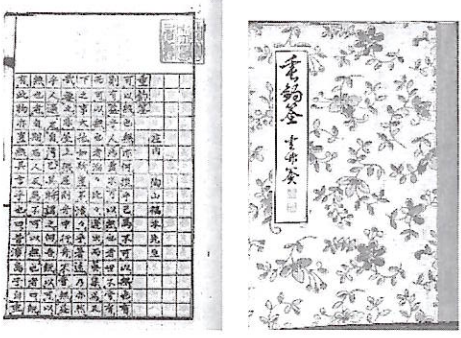


みちのく豆本など



『魚楽 春秋号』

デザイン 佐藤 十弥

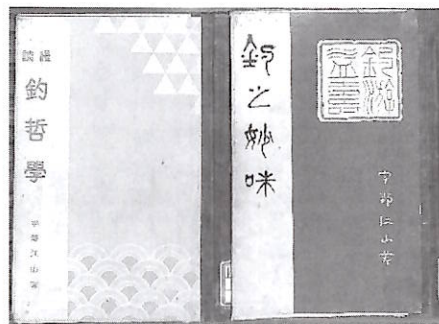


『垂釣筌』模本

の第三一冊『黒鯛』(昭和四十年十一月発行)があります。豆本型の『丘下漁夫』(昭和四十八年四月)は、琢成第二尋常小学校校長で庄内竿作りの名手・中山賢士の釣メモと合せ竿作りの原稿をもとに、子息の岩男が発行したものです。

中山賢士所蔵『垂釣筌』写

本を佐藤常太郎が昭和三十六年四月に写した模本があります。『垂釣筌』は、庄内藩の郡代を務め、橋木と号した磯釣りの名人・陶山七平(儀信一八〇四—一八七二)が文久三年(一八六三)に著した釣りの指南書です。藤沢周平の作品に見られるように、庄内藩では家中の釣りを武士の心得の一つとして奨励していました。漢文で書かれた



『漫談釣哲学』 『釣之妙味』

この本をカナ交じり文にし、概要と感想を付けたものが宇野江山(信吉)著『釣之妙味』(昭和十一年七月発行)に収録されています。江山は鶴岡市七日町生まれ、漢学、禅学、俳句を学び能書家として知られた人物です。他に『漫談釣哲学』(昭和八年九月発行)も著しました。

光丘文庫 所蔵展

九月二十二日(木)まで「酒田町人の営み」と題し、染物の小野九兵衛家、菓子的小松又三郎家、印刷の日賢傳兵衛家の史料を展示しています。



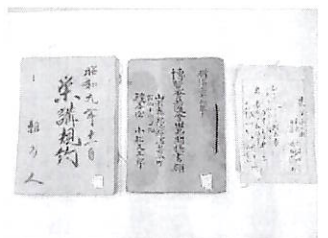
『展示室』

小野九兵衛家は、近江商人といわれ、現在の相生町、天正寺脇にある家で藍染・質屋を営んでいました。



小野九兵衛家

小松又三郎家の史料には、当店の歴史を伝える説明書のほか、銘菓を求める著名人からの書簡・葉書も多く、菓子舗としての名声を今に伝えるものが多くあります。



小松又三郎家

日賢傳兵衛家の史料は、酒田活版所を経営した当時の印刷業に関する帳簿類と地主関係、自家内史料が中心となっています。



日賢傳兵衛家

【執筆者紹介】▽▽▽

高瀬 靖

(詩人・元光丘文庫長)

門松 秀樹

(東北公益文科大学准教授・酒田

市公文書等管理委員会委員)

中山 洋

(酒田市立光丘文庫調査員)

相蘇清太郎

(日本現代詩人会会員)

相原 久生

(酒田市立資料館調査員)

発行 酒田市社会教育文化課
酒田市立光丘文庫

酒田本町二丁目二番四五号
酒田市中町一丁目四番一〇号

電話(24)二九九四番
電話(22)〇五五一番 印刷 明微出版(株)